下受地・十二遺跡

市道上受地十二線道路新設改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 7

群馬県安中市教育委員会
群 馬 県 安 中 市 建 設 部

序

安中市秋間地区は近い将来北陸新幹線が通じ、新安中駅が建設される予定であり、今後大きく発展すると期待される地域です。このたびこの地域内において市道上受地十二線が拡幅されることになりました。ところが、この路線予定地内に遺跡が存在することが判明しましたので事業実施に先立って発掘調査を実施し、記録に残すことになりました。

今回の調査では縄文時代から平安時代にかけての遺構、遺物が発見され、この場所で長期間にわたって生活が営まれていたことが明らかとなりました。特に奈良、平安時代の住居址が数軒検出されたことは、当時窯業地帯であった秋間地区の日常生活を知るうえで非常に重要なことです。

こうした郷土の歴史を知るのに必要な貴重な文化財は今後社会教育、学校教育的見地から広く活用していくとともに、広く市民のご理解もいただけるよう、つとめていきたいと思います。

最後に調査にあたり後協力いただいた地元の方々、梅雨時にもかかわらず調査に従事していただいた作業員の方々には厚くお礼申し上げます。

昭和62年３月

安中市教育委員会

教育長　多胡純策

例　　言

1　本書は安中市（建設部土木課）が行なう市道上受地十二線道路新設改良工事に伴う下受地十二遺跡（略称Ｂ－１）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は昭和61年５月27日より７月15日までの間実施し、遺物整理は昭和61年７月14日より昭和62年３月20日までの間実施した。

3　調査主体は安中市教育委員会であり、調査は社会教育課社会教育係大工原豊が担当し、松本豊がこれを補佐した。

4　遺構写真および遺物写真の撮影は大工原、千田茂雄（調査員）が行なった。

5　本書は縄文時代の遺物を千田が執筆し、遺物観察表は滝野巧（調査員）が作成した。その他の部分の執筆および編集は大工原が行なった。

6　遺物の実測は滝野、千田、酒井理恵（群馬大学学生）、和田宏子、岡田早百合、中川京子、吉沢秀子、金井京子が行なった。

7　遺構、遺物のトレースは小川正子、千田、酒井が行なった。

8　調査にあたり地元の方々に様々な面で御協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

9　調査より報告書作成に至るまで、次の方々に御指導、御助言いただいた。深く感謝いたします。（敬称略）

小野和之　志村哲　若狭徹　中島誠

10　調査組織

安中市建設部

建設部長	星野照夫
土木課長	矢野貞夫
工務一係長	長沢和雄
主任技師	佐藤徹也

安中市教育委員会

社会教育課長	茂木勝文
社会教育係長	反町良一
主任（社教主事）	森泉寿義雄
主任	松本　豊
主任	萩原　昭
主事	大工原豊（担当）

目　　次

本　文　目　次

序
例　言
目　次

Ⅰ　調査に至る経過　1
Ⅱ　調査の経過　1
Ⅲ　調査の方法　1
Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境　2
Ⅴ　基本層序　3
Ⅵ　遺構と遺物　5
　1　縄文時代の遺構と遺物　5
　(1)　遺構　5
　(2)　遺物　8
　2　古墳時代の遺構と遺物　12
　(1)　遺構　12
　(2)　遺物　12
　3　奈良・平安時代の遺構と遺物　17
　(1)　住居址　17
　(2)　その他の遺構　26

付　表　目　次

第1表　H－6号住居址遺物観察表　14
第2表　H－1号住居址遺物観察表　17
第3表　H－3、H－5号住居址遺物観察表　20
第4表　H－4号住居址遺物観察表(1)　24
第5表　H－4号住居址遺物観察表(2)　25

挿　図　目　次

第1図　下受地・十二遺跡と周辺遺跡　3
第2図　基本層序　3
第3図　調査区全体図　4
第4図　T－1号竪穴状遺構、D－9号土壙遺構実測図　5
第5図　縄文土器(1)　6
第6図　縄文土器(2)　7
第7図　石器実測図　10
第8図　H－6号住居址遺構実測図　13
第9図　H－6号住居址遺物実測図(1)　15
第10図　H－6号住居址遺物実測図(2)　16
第11図　H－1号住居址遺構・遺物実測図　18
第12図　H－2、H－3、H－5号住居址遺構・遺物実測図　19
第13図　H－4号住居址遺構・遺物実測図　21
第14図　H－4号住居址遺物実測図(2)　22
第15図　H－4号住居址遺物実測図(3)　23
第16図　土壙実測図　26

図　版　目　次

図版－1　遺跡遠景、調査区全景
図版－2　D－9号土壙、T－1号竪穴状遺構
　B－6グリッド周辺ピット群
図版－3　H－6号住居址
図版－4　H－1号住居址、H－3号住居址
図版－5　H－4号住居址、H－2号住居址
図版－6　縄文時代の遺物
図版－7　H－6号住居址出土遺物(1)
図版－8　H－6号住居址出土遺物(2)
　H－1号住居址出土遺物
図版－9　H－4号住居址出土遺物(1)
図版－10　H－4号住居址出土遺物(2)

Ⅰ　調査に至る経過

昭和60年９月、安中市建設部土木課より安中市教育委員会へ市道上受地十二線道路新設改良事業に係る照会があった。そこで市教育委員会で現地を調査したところ、昭和60年度事業実施部分については埋蔵文化財が存在する可能性が少ないため工事の際に立会いを行なった。しかし昭和61年度に事業を実施する部分には多数の遺物が散布しており、遺跡が存在することが確実であることが判明した。そこで市土木課と市教育委員会で協議を行なった。しかし路線を変更しても遺跡を回避することが不可能であることから、事業実施に先立ち、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになった。

Ⅱ　調査の経過

発掘調査は昭和61年５月27日より７月15日までの約50日間にわたって実施した。調査は調査区が南北に長いことから南半分（A区）を先に調査し、次に北半部（B区）の調査を実施した。A区は６月16日までにほぼ調査を終了した。またB区は６月６日より調査を行ない、７月９日までにほぼ作業を終了した。A区は遺構確認面がローム層上面であり、遺構の確認が容易であったことと、遺構の遺存状態が悪く遺構が浅かったことから調査は順調に進行した。しかしB区は遺構確認面が褐色土層（Ⅳ層）上面であり、遺構の確認が困難であったことと、遺構の遺存状態も良好であり遺物も多かったことから調査は予定よりやや遅れた。また調査の時期が梅雨と重なったことから雨天が多く、調査計画にも影響を与えた。

遺物整理は調査終了とほぼ同時に着手したが、他の調査との関係から断続的に行なった。遺物の水洗、注記作業は９月までに終了したが、大型の遺物が多かったため復元作業に手間取り、最終的には昭和62年３月まで遺物整理作業を実施した。

Ⅲ　調査の方法

下受地・十二遺跡の調査は当初より調査区全域に遺構が存在することが予想されたため、バッ

クホーにより調査区全域の表土掘削を行なった。またそれと並行して作業員による遺構確認作業を行なった。確認された遺構は南から順次精査を行ない、写真撮影および図面作成を行なった。図面は遺物分布図、土層断面図、遺構平面図を作成し、遺物分布図と遺構平面図は平板測量により作成した。

調査区には4 m×4 mのグリッドを設定した。グリッドの基点は北西隅とし、西から東へA、B、C……とアルファベットで呼び、北から南へ1、2、3……と数字で呼称することにした。

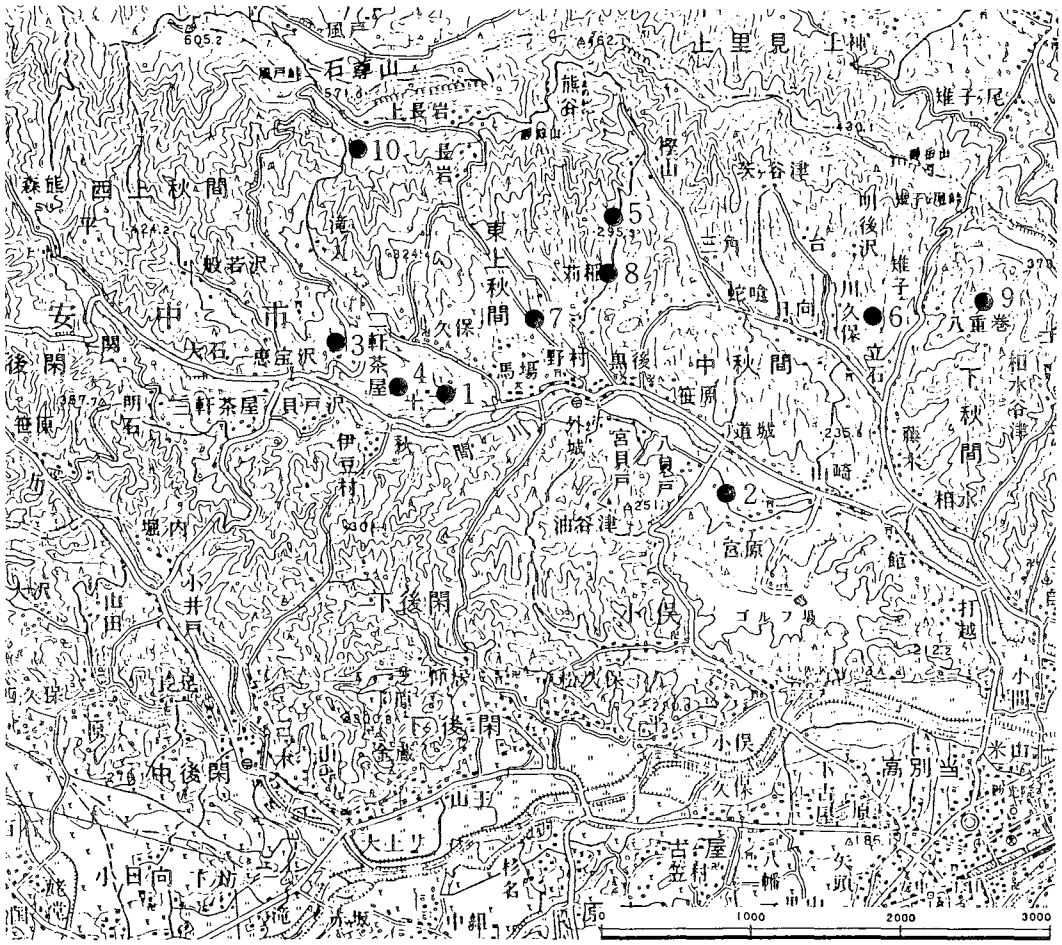
遺物整理は遺物の水洗・注記→台帳作成→接合・復元→実測・拓本→トレースの順で実施し、並行して遺構の図面整理・作成、トレース、写真整理を実施した。

Ⅳ 遺跡の地理的・歴史的環境

下受地・十二遺跡は群馬県安中市東上秋間字下受地、字十二の境界線上に存在する。地番は字下受地1363－1、1364、1365番地、字十二1266－1、1264番地である。

遺跡の存在する場所は秋間丘陵を浸食して流れる秋間川の中流域にあたる。秋間川とその支流の久保川に挟まれた南東方向へ延びる舌状台地の南側斜面に遺跡は位置する。また微地形をみると遺跡の西側に小さな谷が入り込み湧水がみられる。

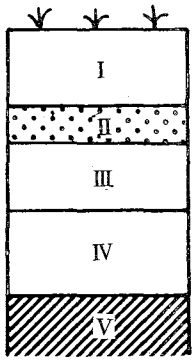
下受地・十二遺跡では縄文時代前期、中期、後期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺構と遺物が出土している。周辺の知られている遺跡には7世紀から8世紀にかけての終末期古墳が多く二軒茶屋古墳(3)、磯貝塚古墳(4)、旧秋間村7号墳(5)、万福原古墳(6)等が存在する。また8世紀前半の墳墓である「馬舟さま」(7)も近くに存在する。生産遺跡としては瓦、須恵器の窯址である苅稲遺跡(8)や瓦窯址である八重巻窯跡(9)等8世紀以降の窯址が多数存在する。さらにこの地域には中世城館址が多く存在しており、本遺跡の小さな谷を隔てた西側には陣屋という字名が残っており、中世城館址が存在していたものとみられる。これまで秋間地区では古墳と窯址は多数知られており、昭和30年代～40年にかけて群馬大学史学研究室により調査も実施されている。しかし集落遺跡は竹下遺跡(2)、北滝の入遺跡(10)など古墳時代以降の集落遺跡が知られているだけで、これまでに発掘調査が実施されたことがなかった。集落遺跡の調査は今回実施した下受地・十二遺跡が最初である。



第1図　下受地・十二遺址と周辺遺跡

1．下受地・十二遺跡　2．竹下遺跡　3．二軒茶屋古墳　4．磯貝塚古墳
5．旧秋間村7号墳　6．万福原古墳　7．馬舟さま　8．苅稲遺跡
9．八重巻窯跡　10．北滝の入遺跡

Ⅴ　基本層序



第2図　基本層序

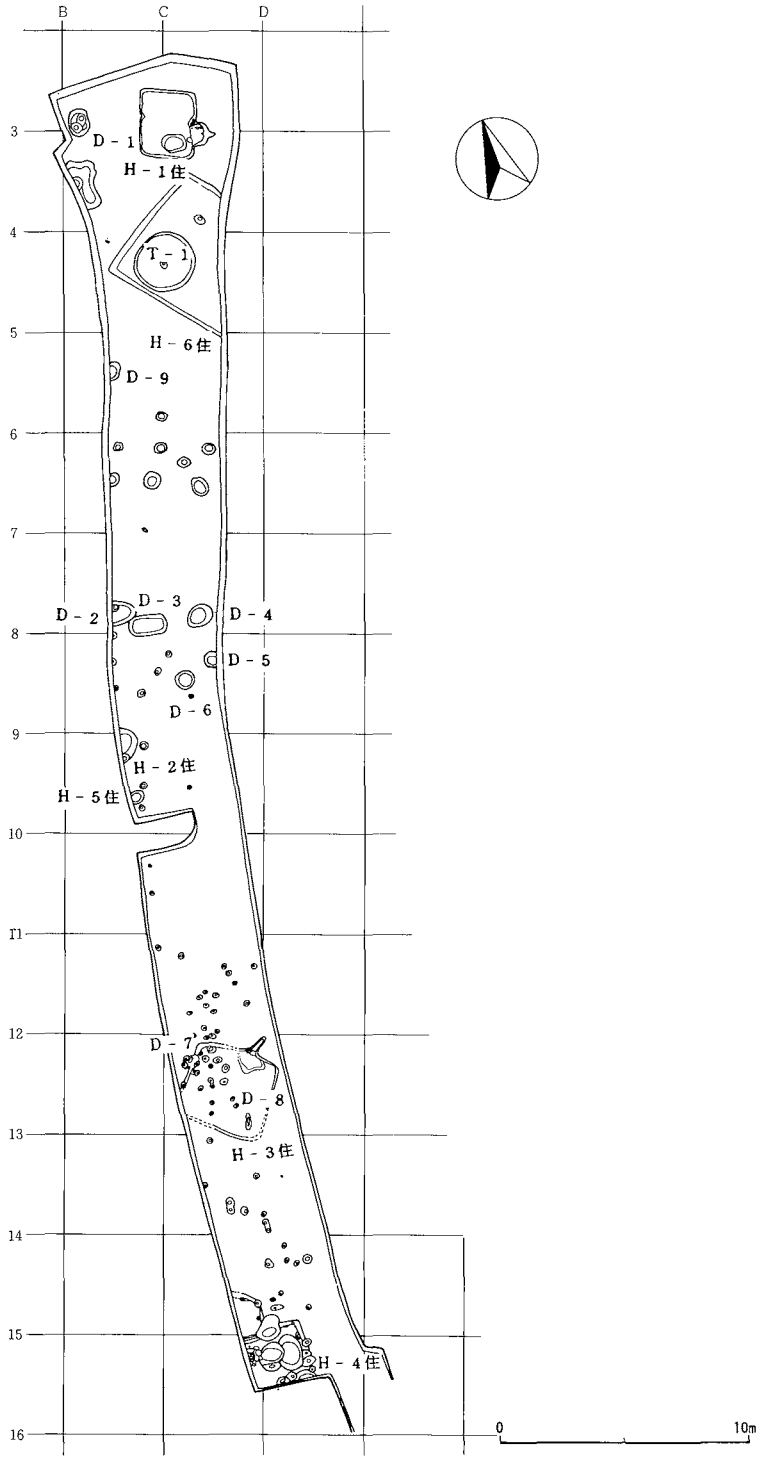
Ⅰ層　黒褐色土層　耕作土層。As－Aを多量混入する。

Ⅱ層　灰白色軽石層　浅間A軽石（As－A　1783年）純層。

Ⅲ層　黒褐色土層　浅間B軽石（As－B　1108年）を混入する層。

Ⅳ層　褐色土層　混入物はほとんどないしまりのある層。

Ⅴ層　黄褐色土層　いわゆるソフトローム層。これよりローム層。


B
C
D
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
D－1
H－1住
T－1
H－6住
D－9
D－2
D－3
D－4
D－5
D－6
H－2住
H－5住
D－7
D－8
H－3住
H－4住
0
10m

第3図　調査区全体図

Ⅵ 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

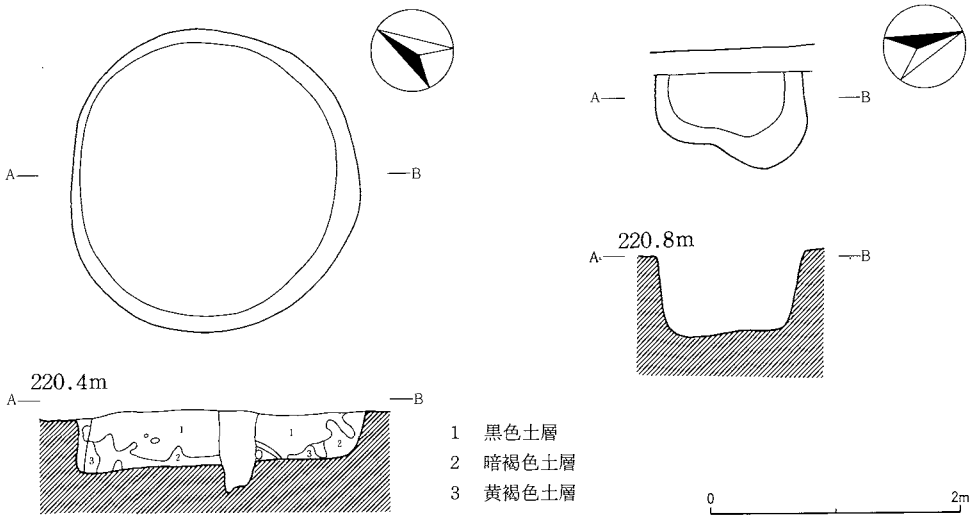
(1) 遺 構（第4図）

縄文時代の遺構としてはT－1号竪穴状遺構とD－9号土壙が検出された。また遺構をはっきり確認することはできなかったが、遺構の存在した可能性のある部分が2箇所確認された。

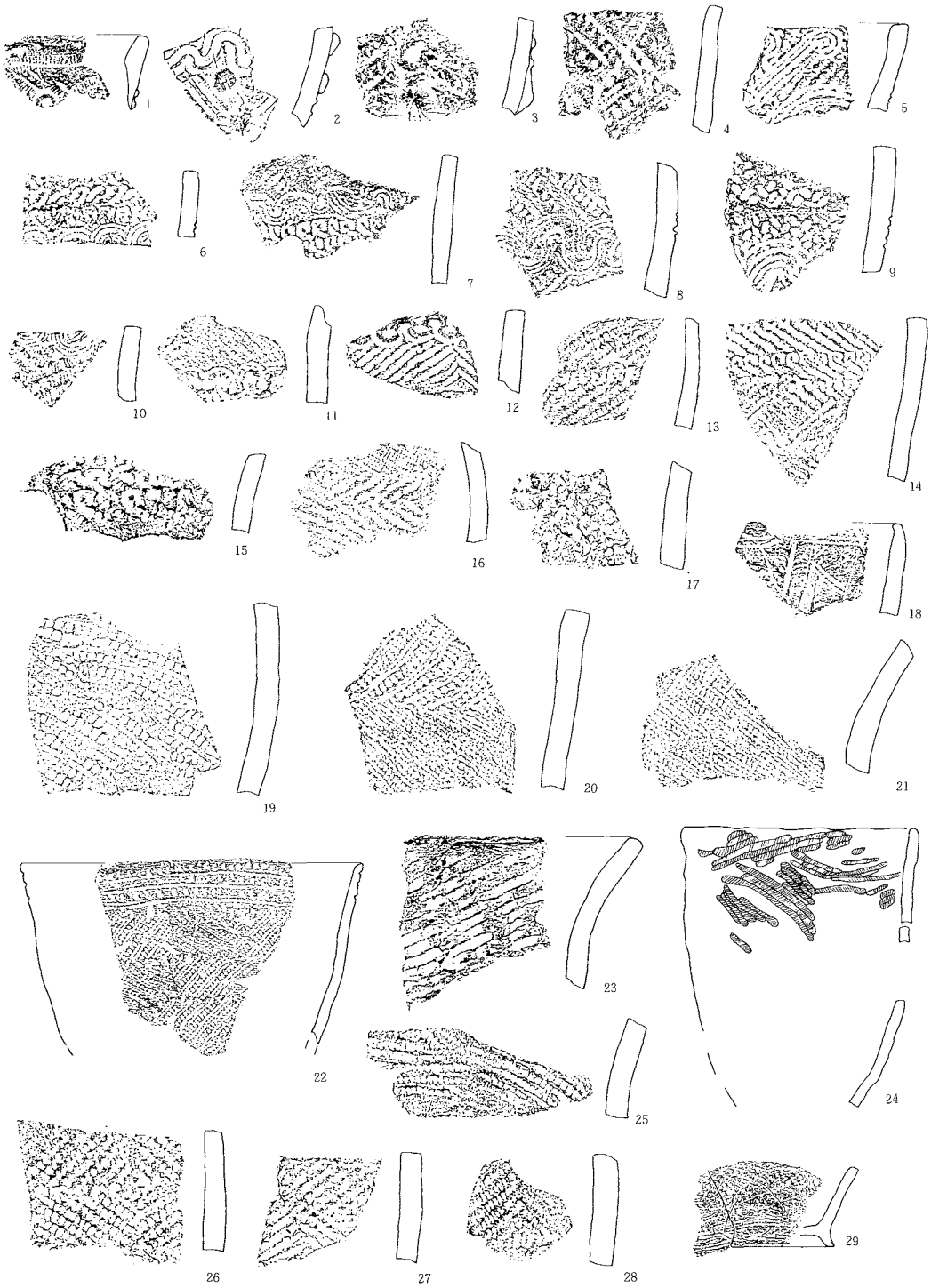
T－1号竪穴状遺構は古墳時代前期のH－6号住居址と重複しており、この住居址の床面下で確認された。H－6号住居址によって遺構の上部は破壊されており、現存する遺構は直径約2.4mの円形で深さは約40cmである。覆土からは縄文時代後期前葉（堀之内式）の遺物が多量出土している。

D－9号土壙はB－5グリッドに存在する。半分は調査区外であったので平面形ははっきりしないが、不正円形であったと推定される。南北は約1.2mあり、深さは約60cmである。覆土中より縄文時代中期終末（加曽利E式）の遺物が大量に検出された。

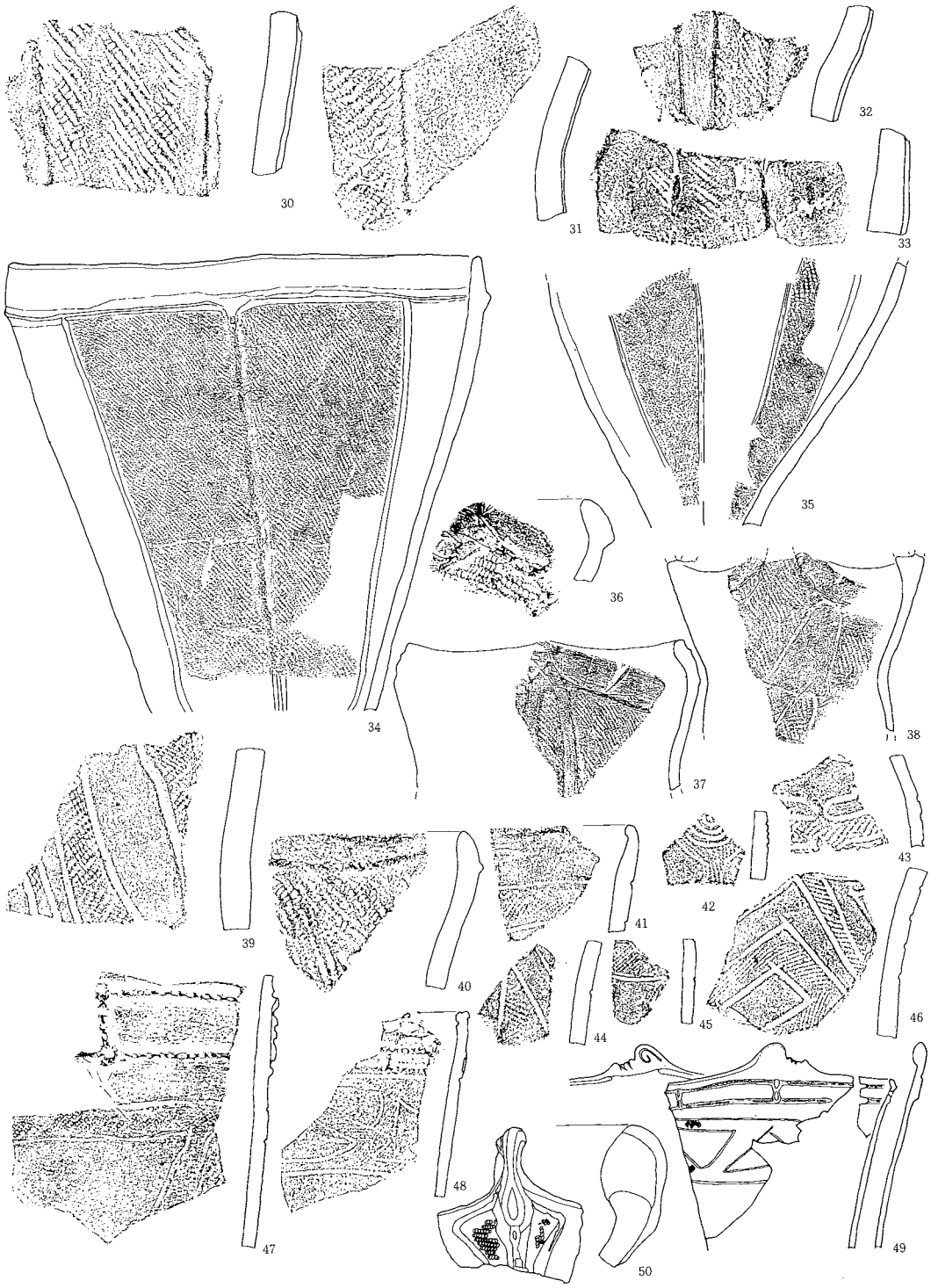
またH－6号住居址の南側（C－5グリッド）には縄文時代前期前半（関山、黒浜式）の遺物が集中しており、ほぼ完形の土器（第5図24）も出土している。遺構は検出できなかったが遺物の面的広がりからみて住居址の存在した可能性がある。そしてB－3グリッドでは拳大から人頭大の礫が面的に出土している。中期末から後期にかけての遺物が出土しているが遺存状態が悪く



第4図 T－1号竪穴状遺構・D－9号土壙遺構実測図



第５図　縄文土器(1)（1/6…22・24・29）



第6図　縄文土器(2)（1/6…34・35・37・38・49）

遺構が存在したか判然としない。

(2) 遺　物

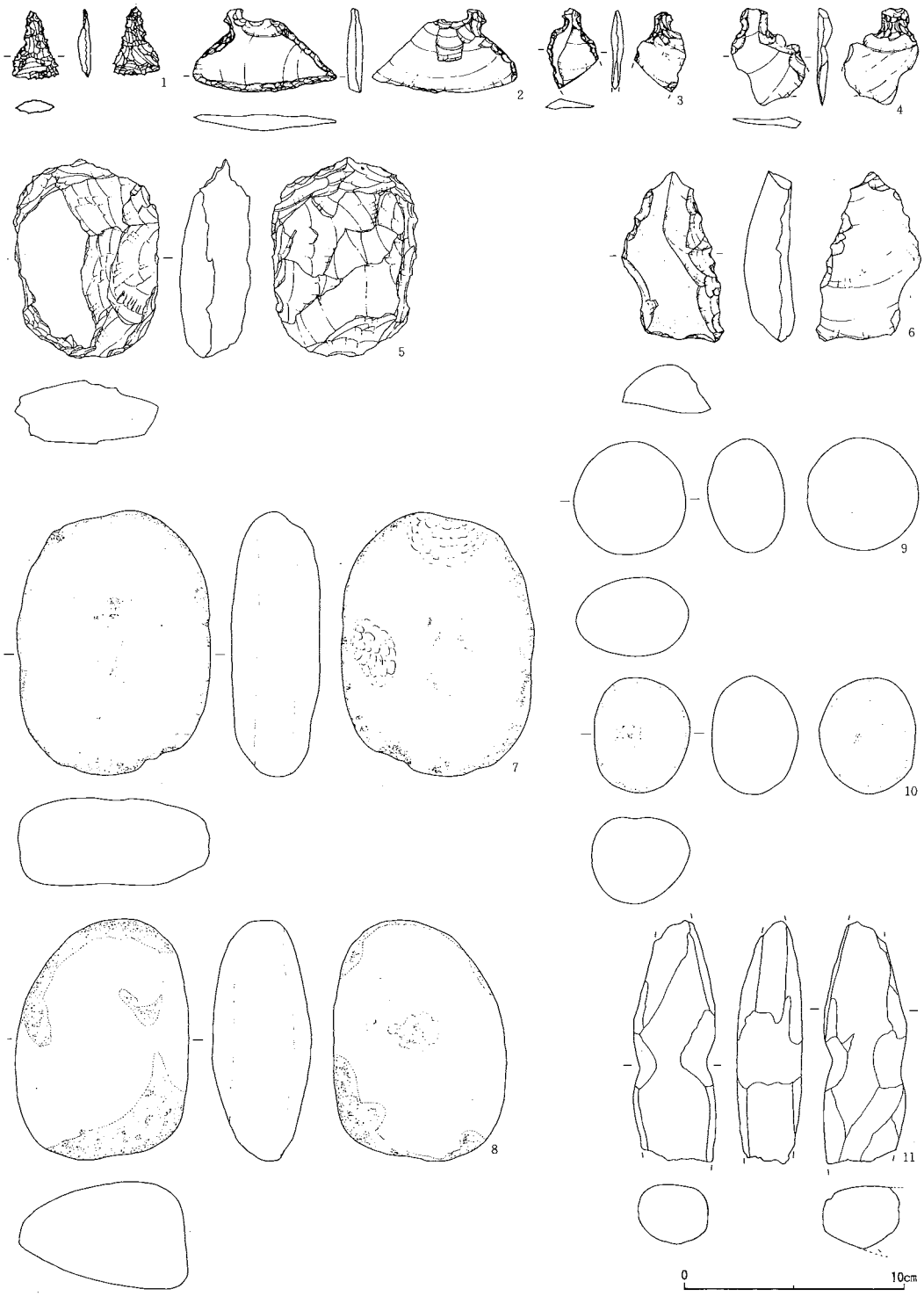
a　土器（第5図、第6図）

1～15は縄文時代前期前半の関山式に属する一群である。1は口縁部破片で、円形竹管による有刺突貼付文、半截竹管による有刻平行沈線文、無刻平行沈線文を施す。2は口縁部破片で、波状口縁を呈する。半截竹管による無刻平行沈線文、コンパス文、貼付文を施す。3は口縁部直下の破片で、半截竹管による有刻平行沈線文、貼付文、円形竹管による有刺突貼付文を施す。4は胴部破片で、半截竹管による有刻平行沈線文、無刻平行沈線文を施す。5は口縁部破片で、単節の縄文を施文した後に半截竹管による蕨手状文、櫛状工具または3截以上の竹管によるコンパス文を施す。6は胴部破片で、短足ループ縄文、櫛状工具または3截以上の竹管によるコンパス文を施す。7は胴部破片で、半截竹管によるコンパス文を境に上部に単節縄文、下部に短足ループ縄文を施す。8は胴部破片で、直前段合撚の縄文を施文した後に半截竹管によるコンパス文を施す。9は胴部破片で、組紐文、櫛状工具または3截以上の竹管によるコンパス文を施す。10は胴部破片で、単節の羽状縄文を施文した後に櫛状工具または3截以上の竹管によるコンパス文を施す。11は胴部破片で、単節の羽状縄文を施文した後に半截竹管によるコンパス文を施す。12は胴部破片で、単節の羽状縄文を施文した後に半截竹管によるコンパス文を施す。13は胴部破片で、長足ループ文を施す。14は胴部破片で、長足ループ文を施文した後に半截竹管による平行沈線で鋸歯文を施す。15は胴部破片で、短足ループ文を施す。

16～29は縄文時代前期前半の黒浜式に属する一群である。16は胴部破片で、単節の羽状縄文を施す。17は胴部破片で、附加条文を施す。18は口縁部破片で、半截竹管による無刻平行沈線により幾何学的文様を施す。19は胴部破片で、附加条の縁文を斜位に施す。20は胴部破片で、直前段合撚の縄文により菱形文様を施す。21は胴部破片で、単節斜縄文、直前段合撚の縄文を施す。22は口縁部～胴部の破片で推定口径31㎝、口縁部に半截竹管による沈線を横位に施文しその区画内に半截竹管による横位の刺突を施し、胴部には直前段合撚の縄文により菱形文様を施す。23は口縁部破片で、無節斜縄文を施す。24は底部を欠くのみの良好な資料である。口径22㎝器高約25㎝口縁下に無節斜縄文による菱形文様を施す。25は胴部破片で、単節斜縄文を施す。26は胴部破片で、単節斜縄文により菱形文様を施す。27は胴部破片で、無節斜縄文により菱形文様を施す。28は胴部破片で、単節斜縄文により菱形文様を施す。29は上げ底の底部破片で、単節斜縄文により菱形文様を施し底部脚部に半截竹管による無刻平行沈線を横位に施す。

30～40は縄文時代中期後半の加曽利E式に属する一群である。30は胴部破片で、垂下する隆起帯により文様帯が縄文部、磨消部に区画され縄文部に無節斜縄文を施す。31は胴部破片で、垂下する隆起帯により文様帯が縄文部、磨消部に区画され縄文部に単節斜縄文を施す。32は胴部破片で、垂下する隆起帯により文様帯が縄文部、磨消部に区画されこれを交互にくり返し縄文部には単節斜縄文を施す。33は胴部破片で、垂下する隆起帯により文様帯が縄文部、磨消部に区画され縄文部には無節斜縄文を施す。34は胴中部～胴下部部分で、垂下する隆起帯により区画され縄文部、磨消部が交互にくり返され縄文部は単節斜縄文を施す。35は口縁～胴中部部分で、口縁無文部下に隆起帯が一周しそれより垂下する隆起帯により区画され単節斜縄文、無節斜縄文、無文、無節斜縄文、単節斜縄文、無文、無節斜縄文、単節斜縄文、無文と、くり返される。36は口縁部破片で、内彎する波状口縁を呈する。口縁無文部下に単節斜縄文を施す。37は口縁部～胴部の破片で推定口径25cm。口縁は内彎しゆるい波状を呈する。口縁無文部下に隆起帯がめぐりそこより隆起帯が垂下しΩ字区画を作り区画内には単節斜縄文を施す。38は口縁部～胴部の破片で推定口径24cm。口縁部は橋状把手を持つ内彎した波状口縁を呈する。口縁部～胴部にかけて沈線によりΩ字区画を作り縄文部、磨消部を交互にくり返し縄文部には単節斜縄文を施す。39は胴部破片で沈線によって文様帯を区画し縄文部、磨消部が交互にくり返され縄文部に単節斜縄文を施す。40は口縁部破片で、口縁無文部下に隆起帯がめぐり隆起帯下には単節斜縄文を施す。

41～50は縄文時代後期前半の掘之内式に属する一群である。41は口縁部破片で、沈線によって横位に区画され細かい単節斜縄文を施す。42は胴部破片で、沈線により同心円文を施す。43は胴部破片で、沈線により横位に区画され区画内に単節斜縄文を施す。44は胴部破片で、沈線により直線的な区画がされ縄文部、磨消縄文部に区分され縄文部には細かい単節縄文を施す。45は胴部破片で、沈線により横位に区画され区画内に細かい単節斜縄文を施す。表面裏面ともに横方向にきれいに磨かれている。46は胴部破片で、直線的な沈線により菱形に区画され縄文部、磨消縄文部が交互にくり返され縄文部には細かい無節斜縄文を施す。47は口縁直下～胴部の破片で、口縁下に二条の刻み目を有する隆起帯を横位に貼付しその間を刻み目を有する隆起帯が垂下し接点に円形刺突文を施す。胴部は直線的な沈線で区画され区画内には細かい単節斜縄文を施し表面裏面ともに横方向にきれいに磨かれている。48は口縁部～胴部の破片で、口縁に小突起が付され口縁下に二条の刻み目を有する隆起帯を横位に貼付しその間を隆起帯が垂下し接点に円形刺突文を施す。胴部は直線的、曲線的な沈線により区画し、区画内には細かい単節斜縄文を施す。表面裏面とも横方向にきれいに磨かれている。49は口縁部～胴部の破片で推定口径22cm。口縁部には突起が付され裏面に刻み目、沈線による渦巻文様が施される。口縁の内側には沈線が横走し口縁下には二条の刻み目を有する隆起帯を横位に貼付し「8」の字状の貼付文を施す。胴上部は直線的、曲線的な沈線で区画され区画内には単節の斜縄文が施され、表面裏面ともに横方向にきれいに磨



第7図　石　器　実　測　図

かれている。また、口縁下に一ヶ所補修孔を持つ。50は口縁部破片で、突起が付されそこから刻み目を有する隆起帯が垂下し曲線的な沈線により区画され区画内には単節斜縄文を施す。

b　石器（第7図）

1は石鏃で、縁辺が鋸歯状を呈する平基無茎鏃である。凹基無茎鏃であったものが欠損により転用されたものであろう。石質は黒曜石で、縄文時代前期の所産と考えられる。2～4は石匙でH－6住南側の縄文時代前期の遺物集中地点から出土しているため、この時期の所産と考えられる。2は横型の石匙で、基部を両面からの調整剝離で、刃部及び側面を片面からの調整剝離によって丁寧に作り出している。3は縦型の石匙で先端を欠損している。片面に自然面を残し素材を生かして基部を両面から、刃部を片面から調整剝離で作り出している。基部には装着の跡と思われる磨滅が見られる。4は不定形の石匙で先端を欠損している。素材を生かし調整剝離によって基部のみを作り出している。5は短冊形打製石斧で、身が分厚く基部を欠損している。片面に自然面を残し、調整剝離はあまり行なわれていない、石質は頁岩である。6はスクレイパーで、片面に自然面を残し、刃部は厚い曲刃で片面から作り出している。石質は頁岩である。7は凹石で楕円形を呈し、縄文時代中期の所産と考えられる。両面に敲打による凹が見られ、表裏両面とも磨痕が見られ側縁部は敲打痕が全周し、敲打による剝離が2ヶ所に見られ、火を受けている。8、9、10は磨石である。8は楕円形で片面に敲打による凹を有し、また、全面に磨面が見られる。9、10は小形磨石で、9はほぼ円形で磨面は全面に見られる。10は楕円形で両面に敲打による凹が見られる。8、9、10ともに石質は安山岩である。11は磨製石斧である。本来は定角式の磨製石斧であったものが欠損後に再加工されたものとみられる。中央部に敲打と研磨によって抉入部を作出している。刃部は細く鏨状を呈している。両端に刃部が作出されていたと思われる。石材は蛇紋岩である。

2　古墳時代の遺構と遺物

(1)　遺　構（第8図）

古墳時代の遺構ではH－6号住居址が確認された。B－3･4、C－3･4グリッドにかけて存在する。住居址の東側$\frac{1}{5}$は調査区外であるが、平面形は正方形を呈していると推定される。規模は約5.2mの正方形で、確認面よりの深さは約40～60cmである。柱穴は2本検出されているが、4本柱であったと考えられる。炉址は中央よりやや北西の部分にあったとみられ、焼土と炭化物が若干検出されたが、炉址自体は検出することはできなかった。

遺存状態は良好であり、大量の遺物が出土している。遺物は住居址の北西部分に偏在する傾向がみられた。覆土下層（2層）に多く包含されていた。この住居址の時期は遺物より弥生時代から古墳時代への過渡的時期のものと考えられる。

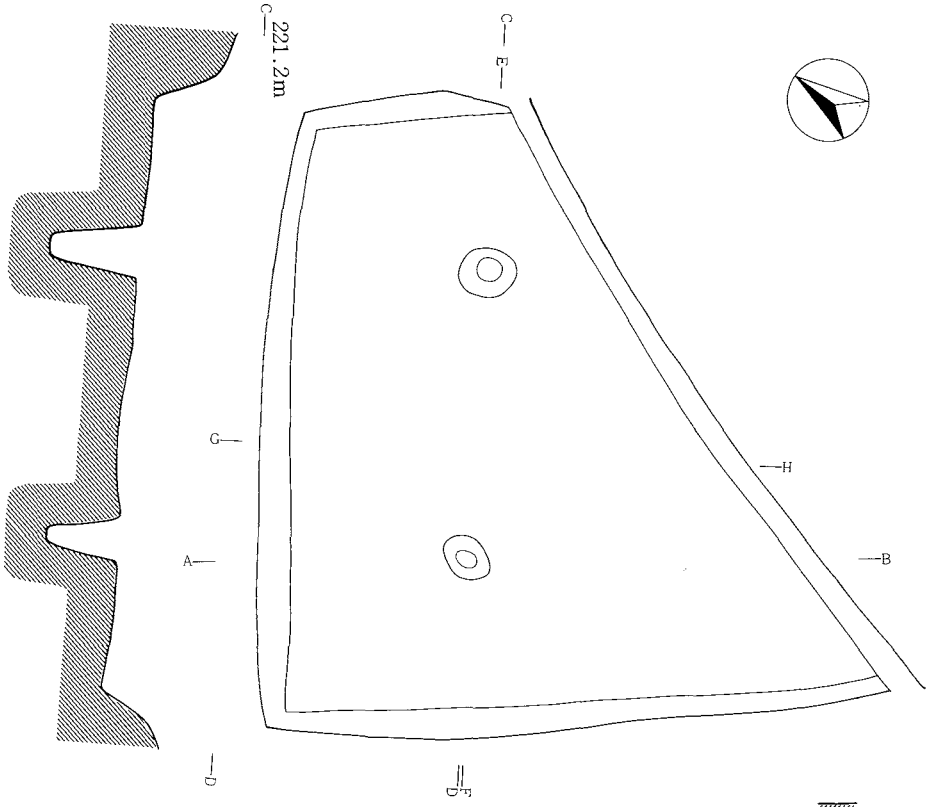
(2)　遺　物（第9図　第10図）

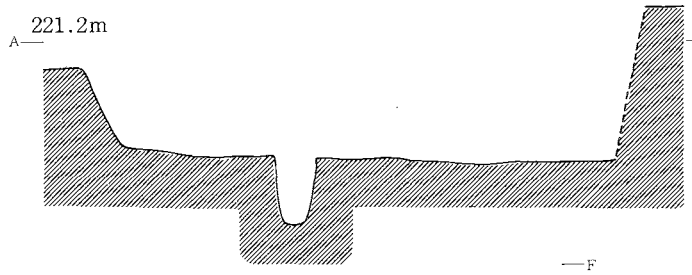
H－6号住居址からは甕、壺、鉢、器台、高坏、手捏等の器種が出土している。甕はすべて単口縁であり、胴は球胴である。調整にはハケメ（1）、ヘラケズリ（2）、縄文（3）のものがある。またS字状口縁の台付甕の胴部破片も出土している。

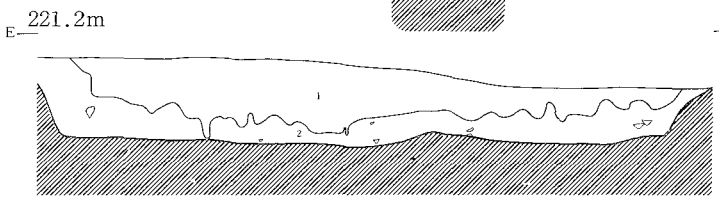
壺は単口縁（4～6）、輪積み痕を残す口縁（7～9、17）、折り返し口縁（16）のものがみられる。器形は胴下半部に最大径をもつものと球胴のものが存在する。調整はハケメをもつものが多くみられる。

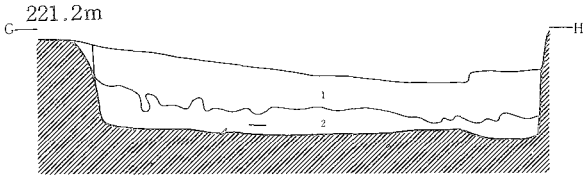
鉢（11）は1点のみである。調整はハケメの後ミガキを行なっている。器台（12）も1点のみであり、全体にミガキが施されているが、表面が風化しており明瞭ではない。高坏（13、14）は脚部の破片が2個体出土しているのみなので詳細は不明である。

これらの遺物の出土状態をみるとほとんど覆土2層中より出土しており、一括廃棄された遺物である可能性が強い。









1　黒色土層　しまり、粘性がややある。白色パミスを少量混入する。

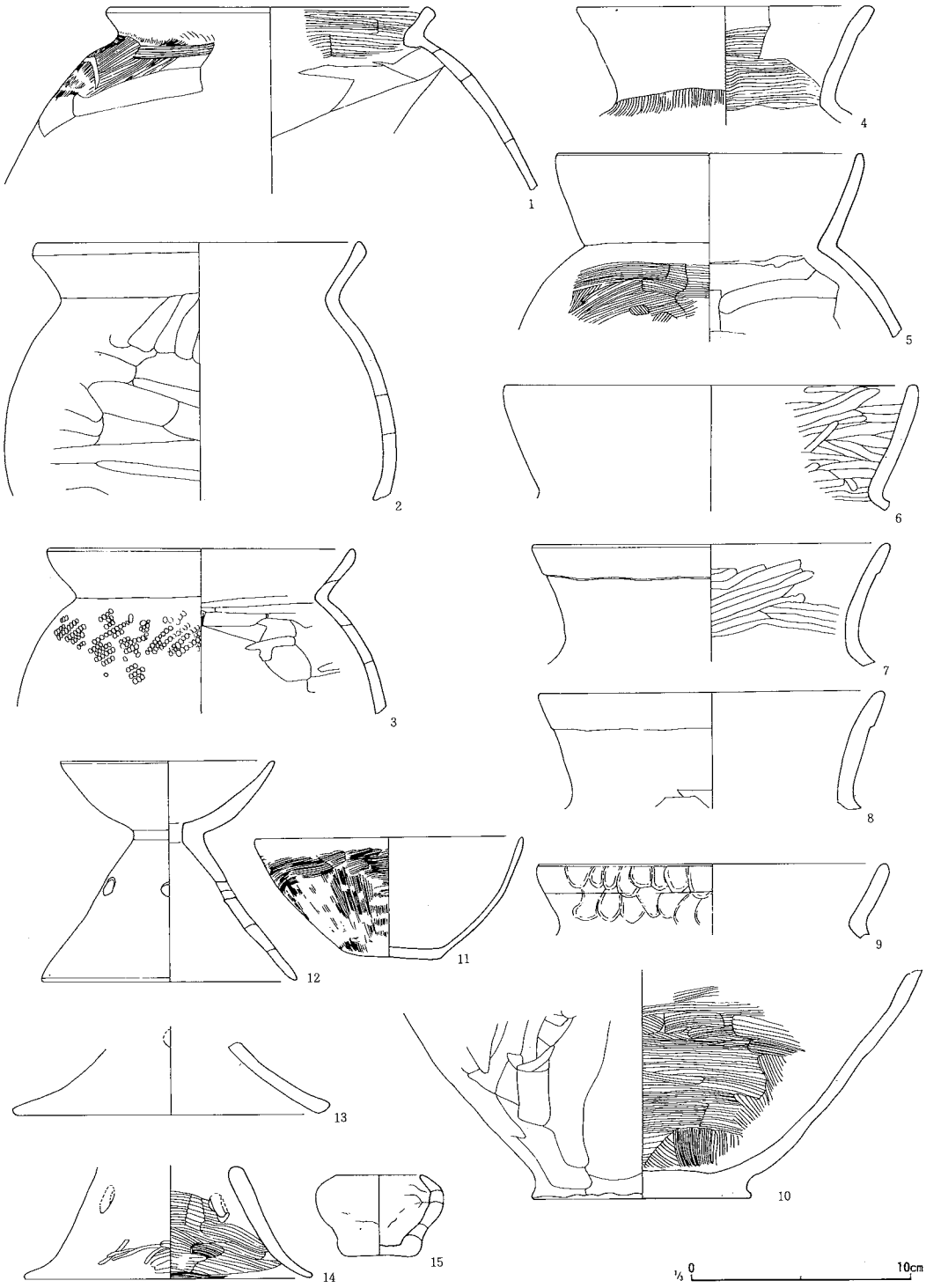
2　褐色土層　しまり、粘性とも1より強い。ローム粒子、ブロックを多量含む。白色パミスを若干混入する。

0　2m

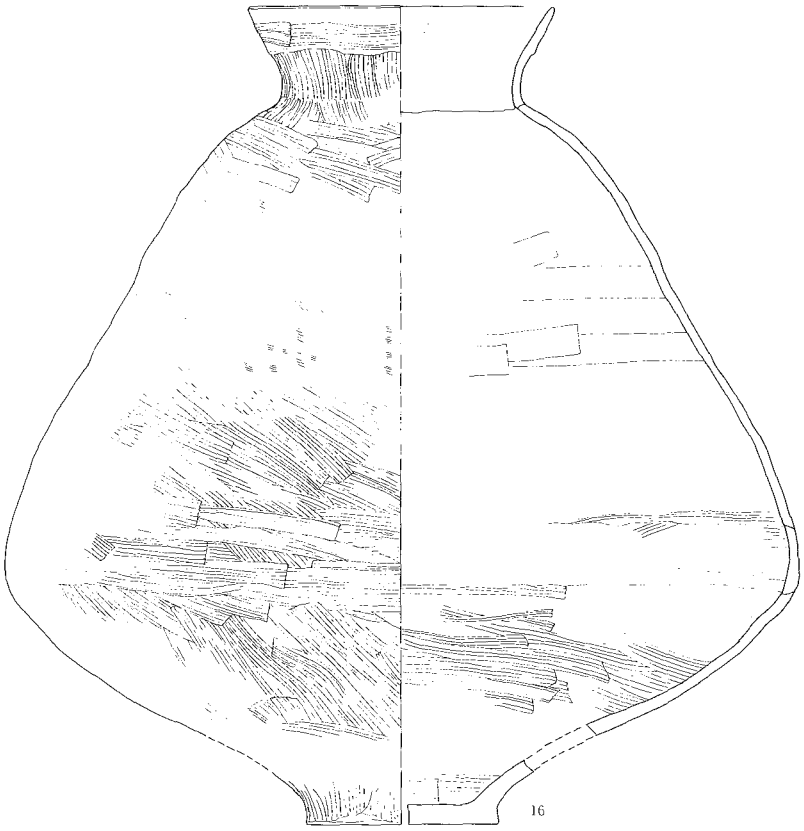
第8図　H－6号住居址遺構実測図

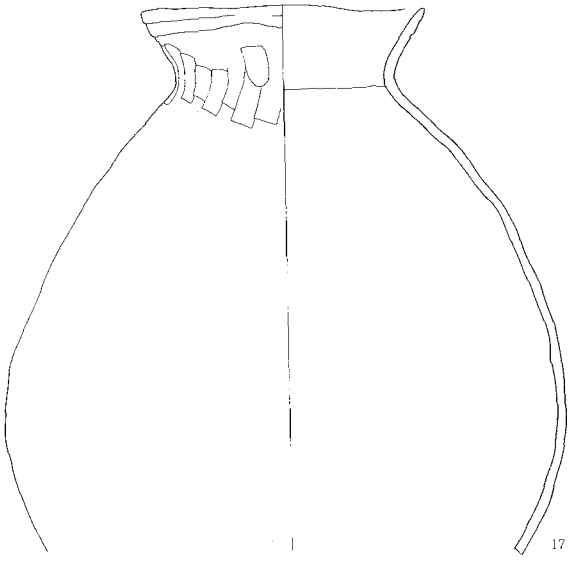
No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	甕	外面：口縁部横ナデ、胴上部斜方向ハケ目一部ヘラケズリ。 内面：口縁部横方向ハケ目、胴部ナデ。	細砂粒を多く含む。	やや軟質	口縁～胴上部 ¼	口縁部と胴部の接合痕が良く残る
2	甕	外面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ調整。 内面：ナデ。	砂粒が少なく緻密。	普通	口縁～胴上部 ⅕	内面胴部に輪積み痕を残す。
3	甕	外部：口縁部横ナデ、胴上部ナデ調整後縄文を施す。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	砂粒が少なく緻密。	普通	口縁～胴上部 ¼	
4	壺	外面：口縁部ナデ、頸頭部縦方向ハケ目。 内面：口縁部横方向ハケ目。	細砂粒が多くやや粗雑。	普通	口縁～肩部 ⅕	
5	壺	外面：口縁部ナデ、胴部斜方向ハケ目。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	細砂粒を少量含む。	普通	口縁～胴上部 ⅕	口縁部と胴部の接合痕が良く残る
6	壺	外面：口縁部ナデ調整。 内面：口縁部ナデ調整後ヘラミガキ。	砂粒が多くやや粗雑	普通	口縁部⅙	
7	壺	外面：口縁部横ナデ、頸部ヘラナデ。 内面：横ナデ後ヘラミガキ。	砂粒が少なく緻密。	普通	口縁部⅙	折り返し口縁No.8と同一か？
8	壺	外面：口縁部横ナデ、頸部ヘラナデ。 内面：横ナデ後ヘラミガキ。	砂粒が少なく緻密。	やや軟質	口縁部¼	折り返し口縁。
9	壺	外面：指腹押圧。 内面：横ナデ。	細砂粒が多い	普通	口縁部¼	外面に輪積み痕が残る
10	壺	外面：ハケナデ後部分的にヘラナデ、底部ナデ。 内面：ハケ目。	砂粒が少なく緻密。	やや軟質	胴下部～底部 ⅓	
11	鉢	外面：口縁部横ナデ、体部上半横方向ハケ目、体部下半縦方向ハケ目、底部ナデ。 内面：ナデ。	砂粒が少なく緻密。	やや軟質	½	
12	器台	外面：磨滅が著しく不明瞭。 内面：ナデ、脚部に4ケ所、器受底部に1ケ所穿孔。	砂粒が多く粗雑	軟質	ほぼ定形	
13	高杯	外面：ヘラミガキ。 内面：ハケ目、脚部に3ケ所の穿孔が残る。	細砂が多い	普通	脚部¾	穿孔は4ケ所と思われる。
14	高杯	外面：ヘラミガキ。 内面：ハケ目、2ケ所穿孔部が残る。	砂粒が少なく緻密。	硬質	脚部¼	
15	手捏	内・外面共に指腹ナデ。	砂粒が少ない	普通	½	輪積み痕と瓜痕が良く残る。
16	壺	外面：ハケナデ後部分的にヘラナデ。 内面：口縁部ヘラミガキ、胴上部ヘラナデ胴下部ハケ目。	細砂粒を少量含む。	普通	口縁～底部 ⅗	折り返し口縁胴下部に最大径
17	壺	外面：口縁部横ナデ、頸部縦方向ヘラケズリ胴部ナデ調整後部分的にヘラミガキ 内面：ナデ調整後ヘラミガキ。	砂粒を多く含む。	やや軟質	口縁～胴下部 ½	内面の剝落が著しい。

第1表　H－6号住居址遺物観察表



第９図　Ｈ－９号住居址遺物実測図(1)





0 20cm

第10図　H－6 号住居址遺物実測図(2)

3　奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 住　居　址

H－1号住居址（第11図）

遺構　調査区の最北部、B－2・3、C－2・3グリッドに存在する。平面形は長方形であり、南北約2.6 m、東西約2.2 mである。確認面からの深さは約20cmである。カマドは東側南寄りに設けられており、袖部は地山削り出しにより作出されている。煙道はカマドより東へ30cm程延びている。またカマドの前面には土壙が存在する。柱穴は検出されなかった。

遺物　遺存状態は比較的良好であり、坏、蓋、甕等が検出されている。1の坏は北東壁際に置かれたような状態で出土した。また9の甕は住居址南西部においてまとまって出土している。

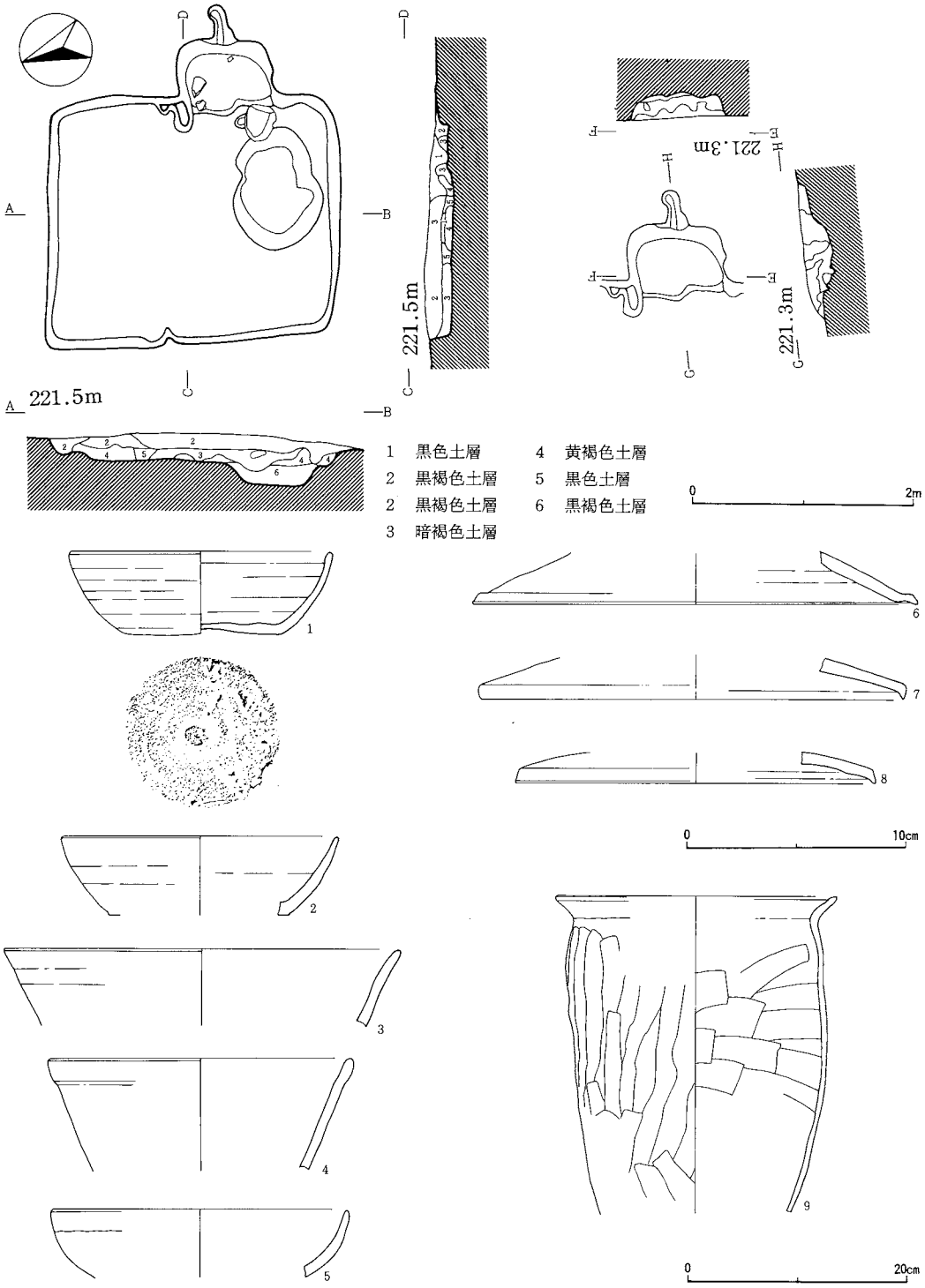
H－2号住居址（第12図）

遺構　B－9グリッドに存在する。この住居址はカマドの部分のみが検出されたもので、住居址本体は調査区の東側に存在していると推定される。カマド内には礫が多量入り込んでいた。

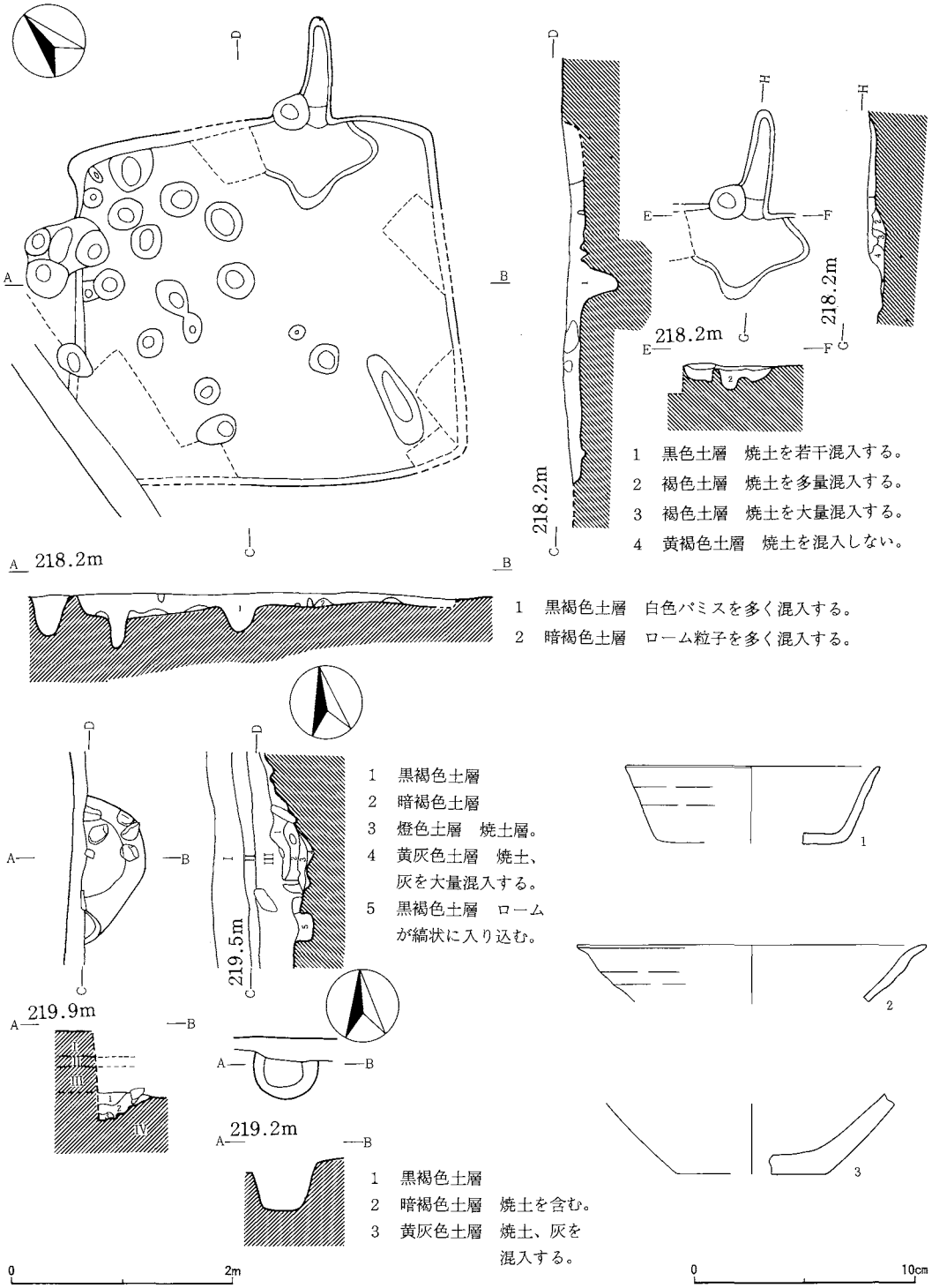
遺物はほとんど検出されなかった。

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転ヘラ切り。	緻密	硬質	完形	外面に自然釉を受ける
2	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	緻密	硬質	口縁～体部 1/8	内面に小黒斑
3	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	緻密	硬質	口縁部 1/12	
4	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	緻密	硬質	口縁～体部 1/8	
5	土師器坏	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含むが緻密	普通	口縁～底部 1/10	体部外面が磨滅
6	須恵器蓋	内外面共に回転横ナデ。	緻密	硬質	口縁部 1/9	外面に自然釉を受ける
7	須恵器蓋	内外面共に回転横ナデ。	白色砂を少量含む	硬質	口縁部 1/10	
8	須恵器蓋	内外面共に回転横ナデ。	緻密	硬質	口縁部 1/12	
9	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、胴上部ヘラナデ、胴下部ナデ。	砂粒を多く含む	普通	1/2	

第2表　H－1号住居址遺物観察表



第11図　H－1号住居址遺構・遺物実測図



第12図 H－2、H－3、H－5号住居址遺構遺物実測図

H－5号住居址（第12図）

遺構　B－9グリッドに存在する。H－2号住居址同様カマドの一部が検出されたのみであり、本体は調査区西側に存在する。

遺物　少量の遺物がカマドの覆土中より検出された。

H－3号住居址（第12図）

遺構　C－12グリッドに存在する。平面形は正方形であり、規模は3.4 m × 3.5 mである。遺存状態は悪く、壁はほとんで削られている。また耕作による攪乱もはげしい。カマドは北側やや東寄りにある。煙道は約1 mほど北へ延びている。柱穴は後世のものが多数重複しており特定することはできなかった。また覆土下層には多数の人頭大の礫が混入していた。

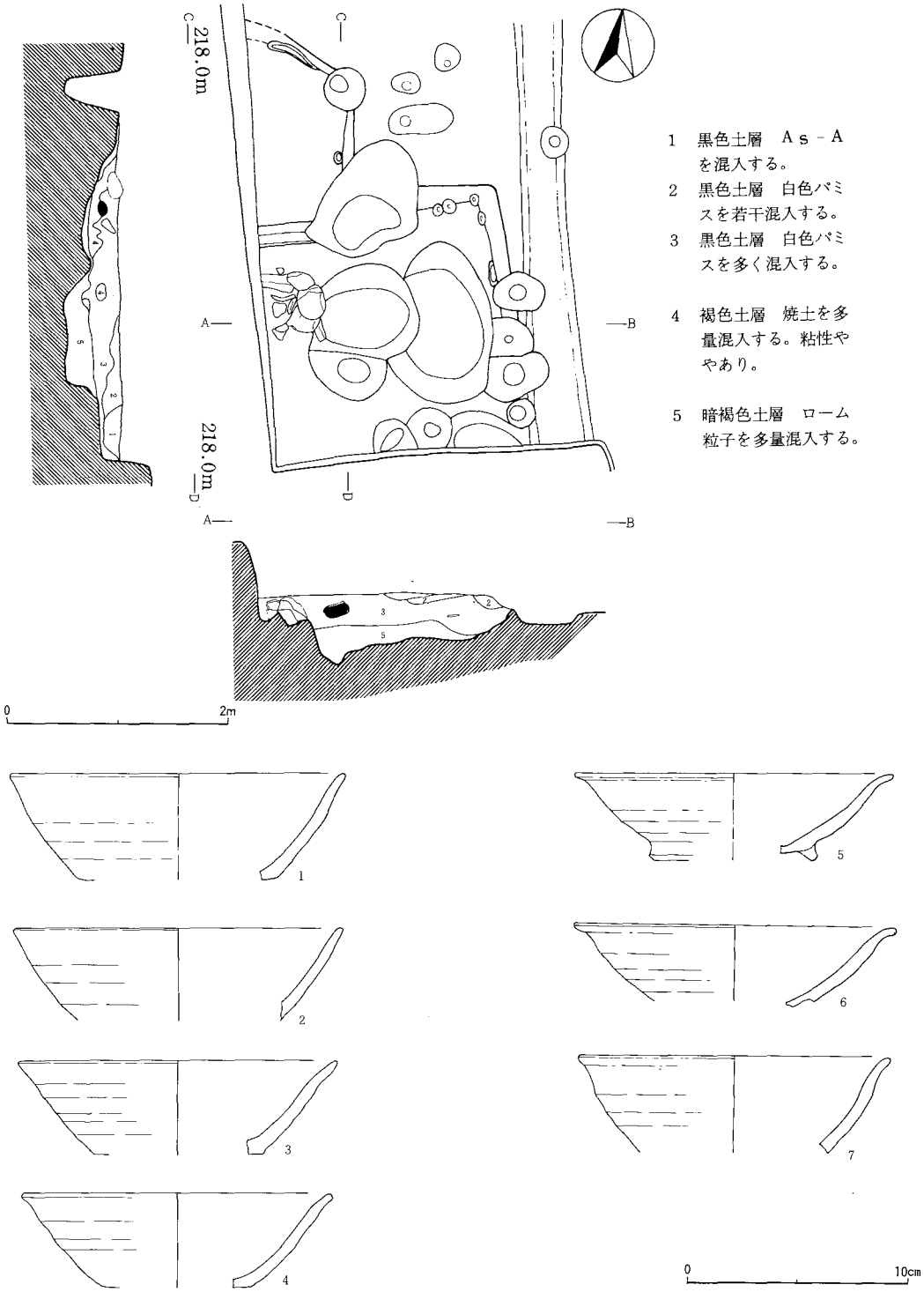
遺物　小量の遺物が住居址全域から散漫に出土しているが、中に縄文土器も含まれ、住居址に共伴する遺物は非常に少ない。また攪乱による影響も大きいと考えられる。

H－4号住居址（第13図　第14図　第15図）

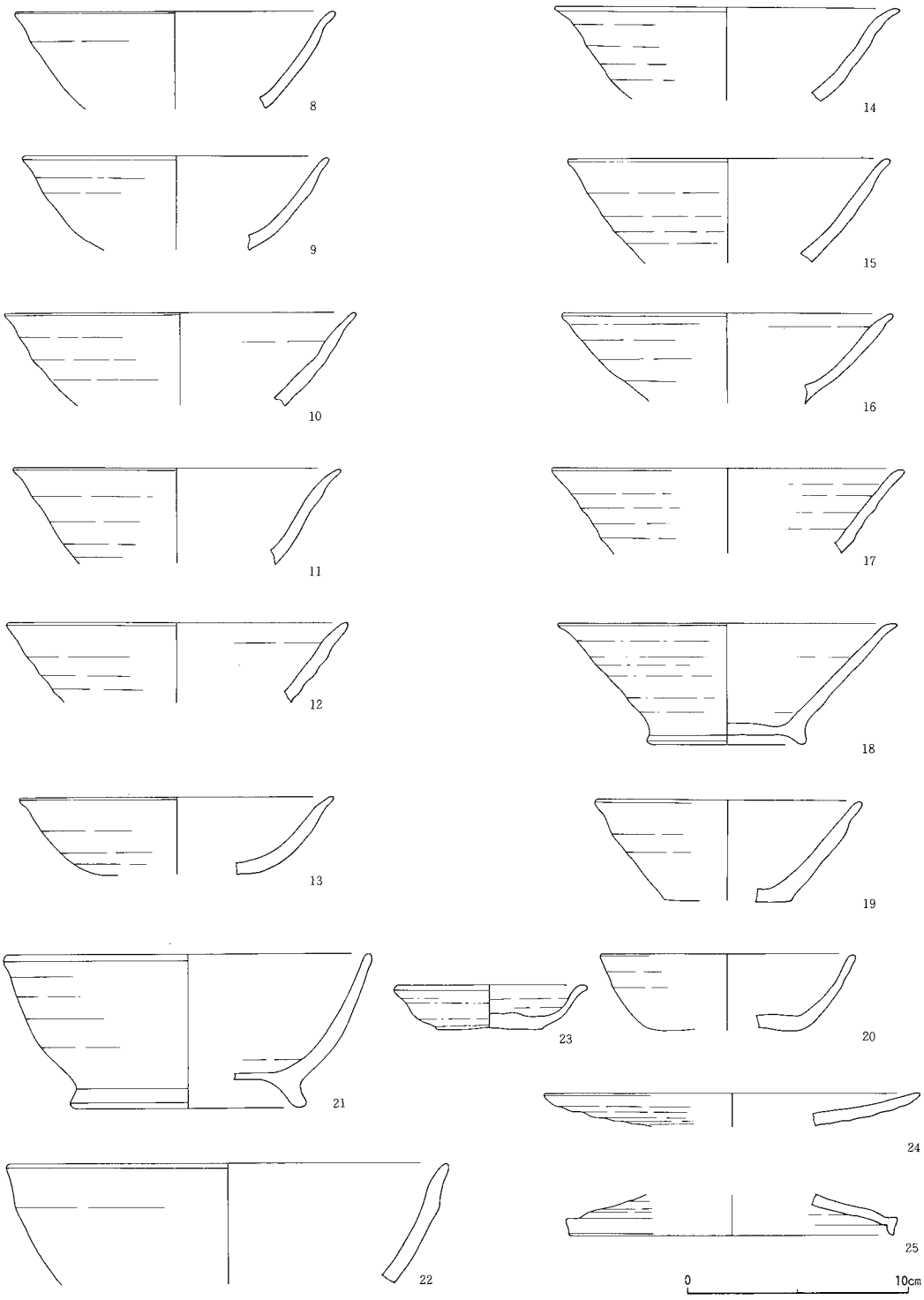
遺構　C－14・15、D－14・15グリッドに存在する。この部分には住居址が3軒重複しており、さらに土壙やピットも多数重複している。北側に位置する住居址（H－4 a住）は掘り込みが浅く遺物も少ない。半分以上が調査区外にあるため平面形、規模等は不明である。また南側に位置する住居址（H－4b住）は多数の土壙やピットが重複しており床面がほとんど残っていない状態であった。カマドは検出することができなかった。遺物は多量出土しているが、多くはこの住居址に共伴するものであるとみられる。この住居址はさらに南側へ延びているものとみられる。そして石組カマドのみが検出された住居址（H－4c 住）がH－4b住の西側に重複している。石組カマドの位置から住居址本体は調査区西側に存在すると考えられる。

No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転ヘラ切り。	緻密	硬質	口縁～底部 1/4	内面に降灰
2	須恵器 坏	内外面共に回転横ナデ。	緻密	硬質	口縁部 1/12	内面に降灰
3	羽釜	外面：胴～底部ナデ。 内面：ナデ。	砂粒は少ないが粗雑	普通	胴下部～底部 1/5	須恵器

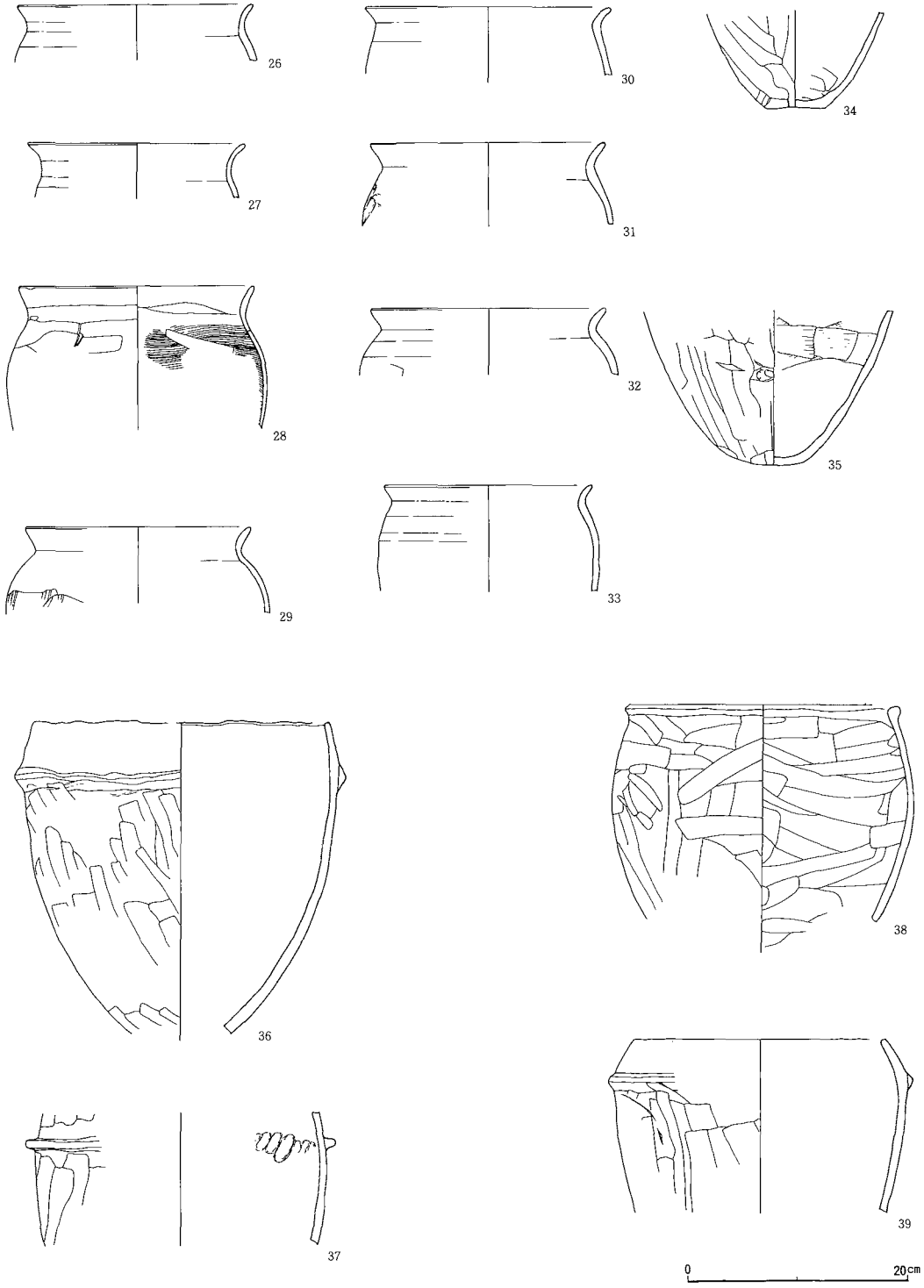
第3表　H－3、H5号住居址遺物観察表



第13図 H－4号住居址遺構遺物実測図



第14図　H－4号住居址遺物実測図(2)



第15図　H－4号住居址遺物実測図(3)

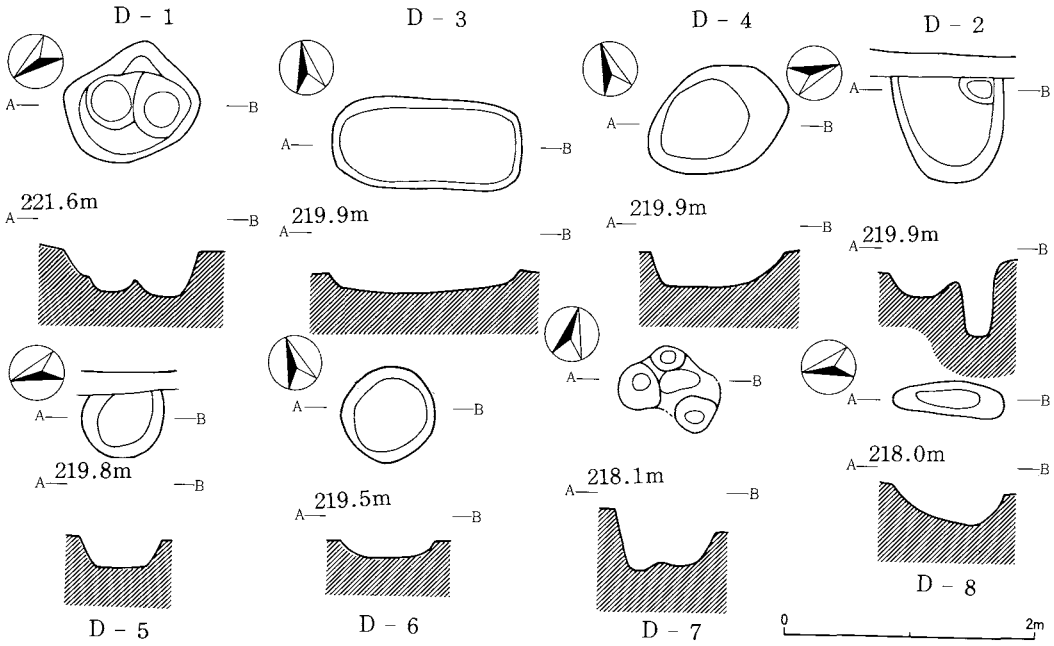
No.	器種	調整技法	胎土	焼成	残存	備考
1	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り。	やや粗雑	普通	1/4	
2	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	やや粗雑	普通	口縁～体部 1/10	外面の一部が酸化
3	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	普通	1/10	
4	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り。	やや粗雑	普通	1/10	
5	須恵器高台椀	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り。後付高台。	白色砂粒を少量含む	硬質	1/4	口縁部が大きく歪む。
6	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	やや粗雑	普通	口縁～体部 1/8	
7	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	細砂粒を少量含む	普通	口縁～体部 1/4	
8	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	小石・砂粒を少量含む	やや軟質	口縁～体部 1/12	酸化気味
9	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	砂粒を多く含む	普通	口縁～体部 1/12	
10	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	砂粒が少なく緻密	やや軟質	口縁～体部 1/8	口唇部にヒビ割れ
11	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	細砂粒を多量に含む。	やや軟質	口縁～体部 1/7	
12	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	緻密	やや軟質	口縁部 1/8	外面に稜が良く残る。
13	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り。	緻密	硬質	1/9	
14	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	細砂粒がやや多く粗雑	硬質	口縁～体部 1/6	
15	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	緻密	普通	口縁～体部 1/4	
16	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	砂粒を極少量含む	普通	口縁～体部 1/10	
17	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ。	砂粒が多く粗雑	やや軟質	口縁部 1/5	土師質
18	須恵器高台椀	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り後付高台	やや粗雑	普通	1/3	土師質
19	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り。	細砂粒が多くやや粗雑	やや軟質	1/6	
20	須恵器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転ヘラケズリ。	緻密	硬質	1/4	
21	須恵器高台椀	内外面共に回転横ナデ、底部不明瞭。	小石を若干含むが緻密	普通	1/5	
22	須恵器鉢	内外面共に回転横ナデ。	白色砂粒を極少量含む	普通	口縁部 1/12	外面の剥落が著しい。
23	土師器坏	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り。	砂粒を少量含む	普通	宗形	灯明皿
24	須恵器皿	内外面共に回転横ナデ。	白色砂粒を多く含む	普通	口縁部 1/9	土師質
25	須恵器蓋	内外面共に回転横ナデ。	黒色砂粒を少量含む	硬質	口縁部 1/10	

第4表　H－4号住居址遺物観察表(1)

No.	器　種	調　整　技　法	胎　土	焼　成	残　存	備　考
26	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。	砂粒が少なく緻密	普　通	口縁部 1/8	コの字状口縁を呈する
27	土師器甕	内外面共に横ナデ。	砂粒が少なく緻密	普　通	口縁部 1/12	コの字状口縁を呈する
28	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、胴部横方ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、胴部ハケ目。	小石砂粒を少量を含む	普　通	口縁～胴上部 1/4	コの字状口縁を呈する
29	土　釜	外面：口縁～肩部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	砂粒を多く含む	普　通	口縁～胴上部 1/8	土師質
30	土　釜	外面：口縁部横ナデ、胴部指腹ナデ。 内面：横ナデ。	砂粒を少量含み粗雑	普　通	口縁～胴上部 1/12	土師質
31	土　釜	外面：口縁部横ナデ、胴部指腹ナデ。 内面：横ナデ。	砂粒を少量含み粗雑	普　通	口縁～胴上部 1/12	土師質
32	土　釜	外面：口縁へ肩部横ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：横ナデ。	砂粒を少量含み粗雑	普　通	口縁～胴上部 1/12	土師質
33	土　釜	内外面共に回転横ナデ。	砂粒を少量含み粗雑	やや硬質	口縁～胴上部 1/5	土師質
34	土師器甕	外面：胴部斜方向ヘラケズリ、底部不明瞭。 内面：ナデ、一部ヘラナデ。	小石砂粒を小量含む。	普　通	胴下部～底部 1/3	
35	土師器甕	外面：胴部継、底部不定方向ヘラケズリ。 内面：ナデ、一部ヘラナデ。	砂粒を少量含む。	やや硬質	胴下部～底部 1/2	丸底気味で不安定
36	羽　釜	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。 内面：横ナデ。	小石砂利が多い。	やや硬質	口縁～胴下部 1/3	土師質
37	羽　釜	外面：口縁部及び胴部縦方向ヘラケズリ ツバ横ナデ。 内面：横ナデ、ツバ部分に指腹押圧。	砂粒を少量含む。	硬　質	口縁下部～胴上部 1/12	須恵器
38	土　釜	外面：口縁部横ナデ、胴部不定方向ヘラナデ。 内面：ヘラナデ。	細砂粒が多くやや粗雑	やや軟質	口縁部～胴下部 2/5	土師質
39	羽　釜	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。 内面：横ナデ。	小石砂粒が多い	やや硬質	口縁～胴上部 1/7	土師質

第5表　H－4号住居址遺物観察表(2)

遺物　遺存状態は悪いが、多くの遺物が出土している。出土状態をみると**H－4b**住内に重複する土壙やピットの部分に遺物が集中する。また出土層位をみると覆土上層より床面直上の位置まで遺物が多く、土壙覆土中には遺物は少ない。そして土壙との切り合い関係をみると住居址の方が新しいと判断される。以上のことから遺物の多くは**H－4b**住覆土中に包含されていたものと考えられる。



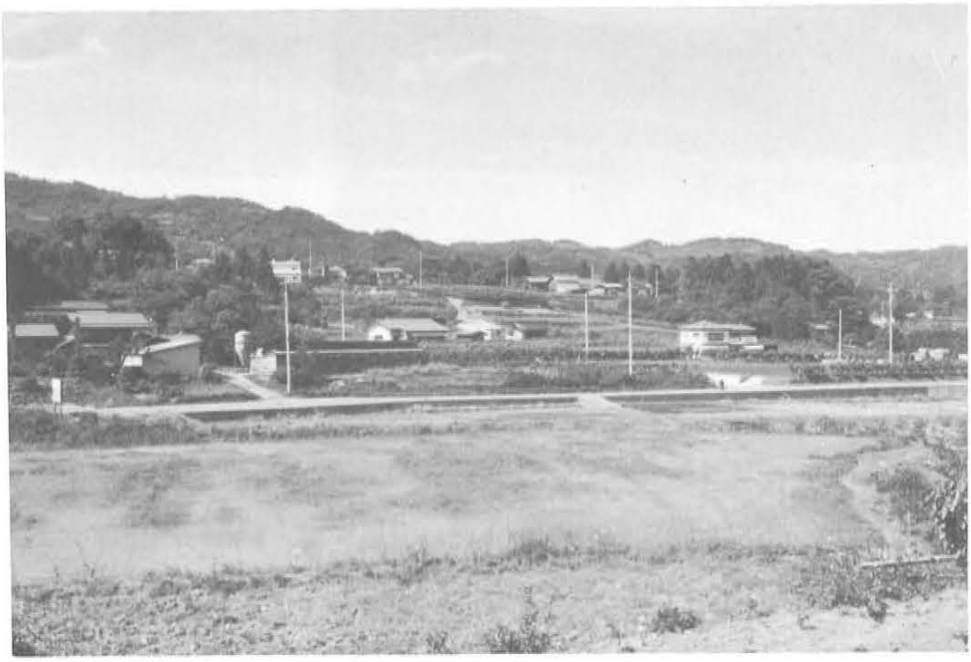
第16図　土　壙　実　測　図

(2)　その他の遺構（第16図）

今回の調査では住居址のほかに土壙、ピットが多数検出された。これらの遺構は覆土と出土遺物から奈良・平安時代およびそれ以降の時期のものとみられるが、ここでは一括して扱うことにする。

土壙はB－7・8、C－7・8グリッドにまとまって存在する。またH－3号住居址、H－4号住居址に重複して幾つか存在する。これら土壙は形状も様々であり、遺物も少量なので性格については判然としない。

ピットは数箇所にまとまる傾向がある。このうちB－5・6、C－5・6グリッドにおいて検出されたものは比較的大きく、相互の位置関係にも多少規則性を見い出すことができるので、建物址か柵列のような構造物が存在した可能性もある。またH－3号住居址とその北側に存在するピット群は小さなものが多数密集している。



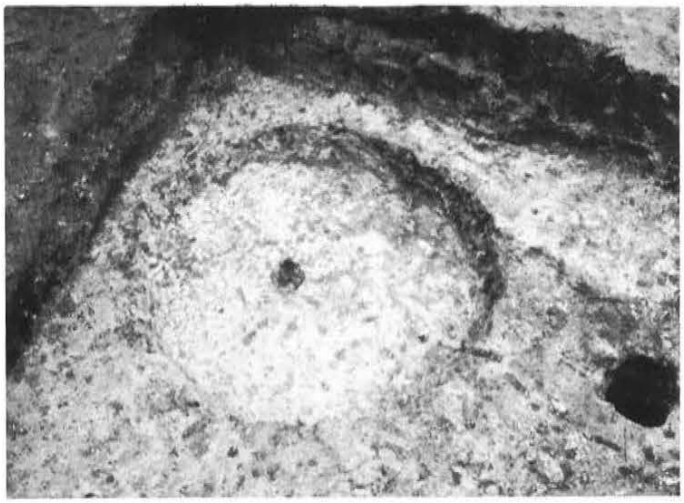
遺 跡 遠 景

調 査 区 南 側

調 査 区 北 側

図版－２

Ｄ９号土壙遺物
出土状況



Ｔ－１号竪穴状遺構

Ｂ－６グリッド周辺
ピット群

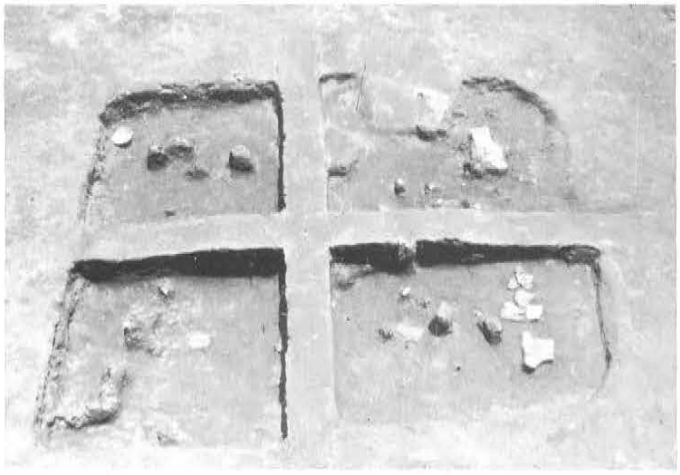
H－6号住居址

H－6号住居址遺物
出土状況(1)

H－6号住居址遺物
出土状況(2)

図版－4

H－1号住居址



H－1号住居址遺物
出土状況

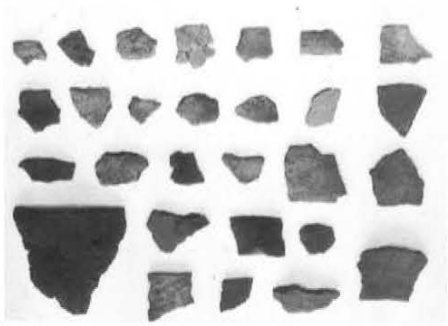
H－3号住居址

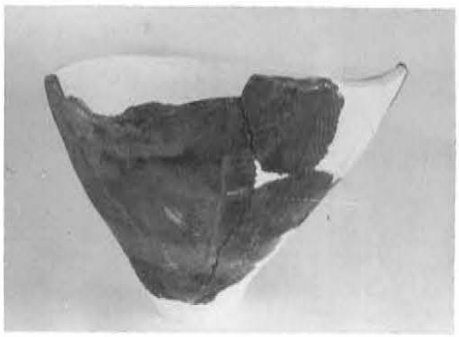
H－4号住居址

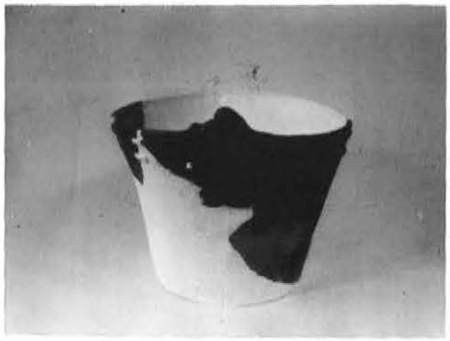
H－4号住居址遺物
出土状況

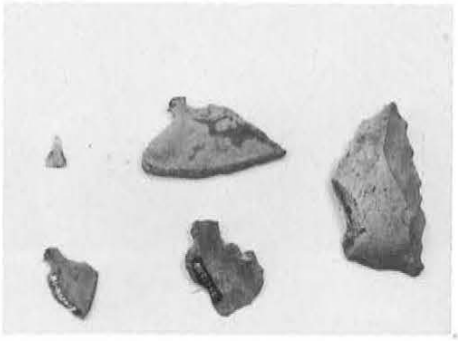
H－2号住居址遺物
出土状況

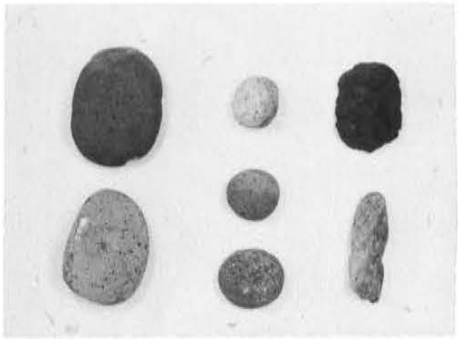
図版－6





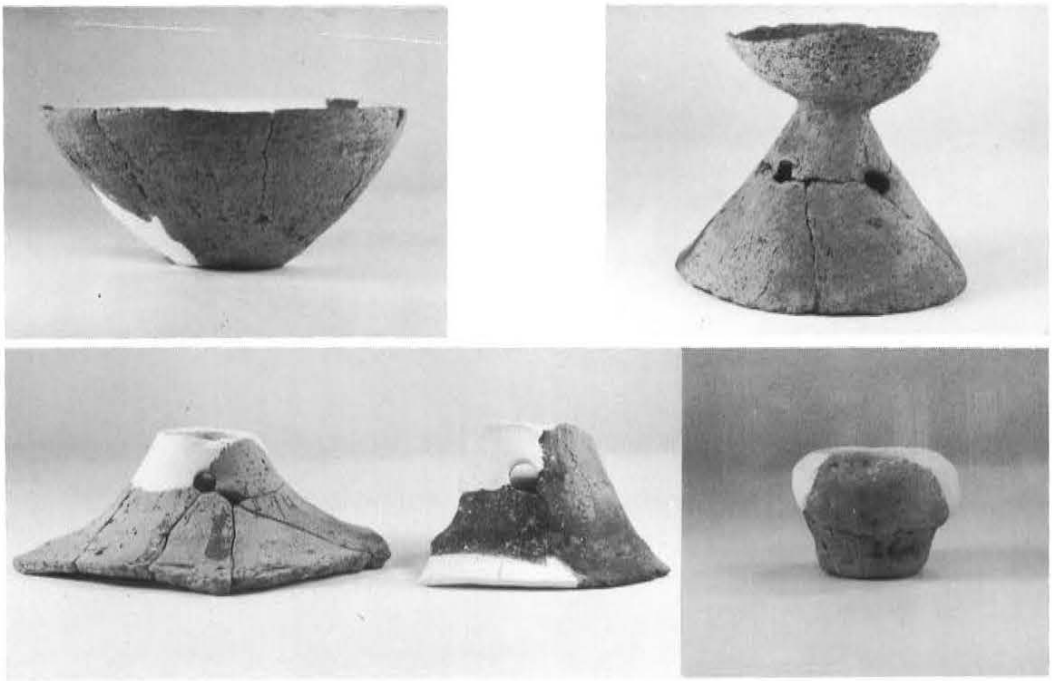




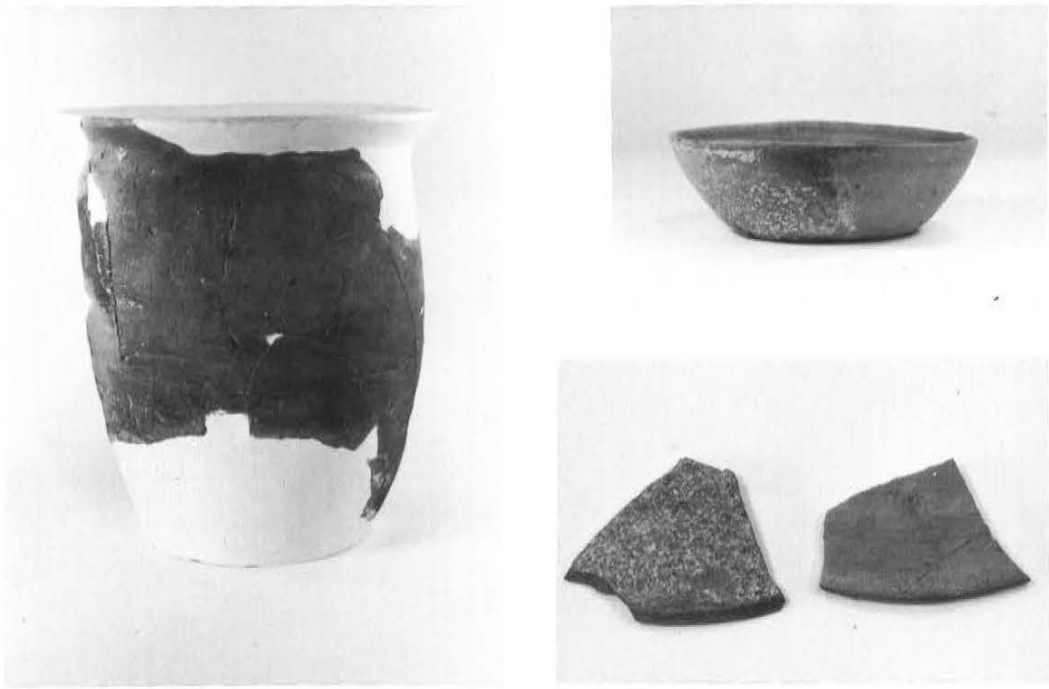


縄文時代の遺物

H－6号住居址出土遺物(1)

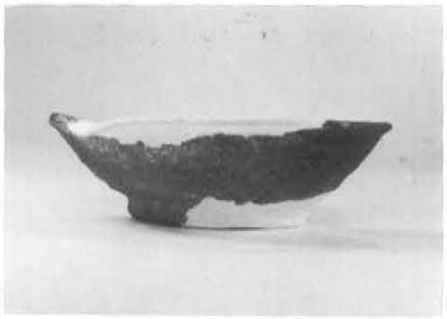


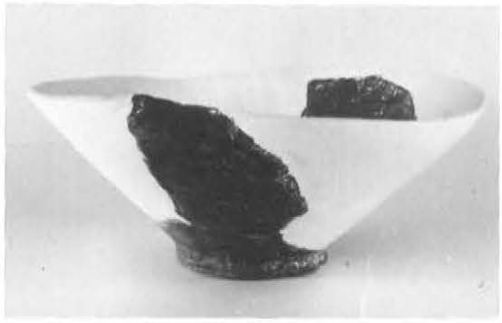
H－6号住居址出土遺物(2)

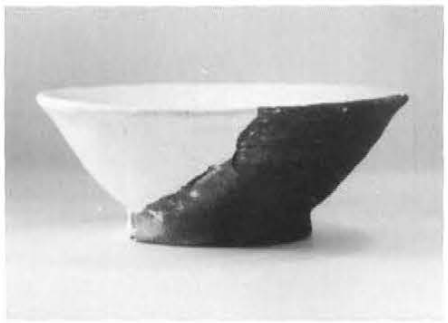


H－1号住居址出土遺物

H－4号住居址出土遺物







H－4号住居址出土遺物(2)

発掘調査参加者

中村正義　反町重夫　秋山幸子　磯貝スエ子　大河原富江　大槻孝子　島崎幸子

遺物整理参加者

小川正子　川崎弘子　萩原喜美代　大和房子　斎藤説成　酒井理恵　和田宏子　岡田早百合
金井京子　中川京子　吉沢秀子　　岩坂尚子

下受地・十二遺跡

―市道上受地十二線道路新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

発行日　昭和62年3月31日
編集　安中市教育委員会社会教育課
発行　安中市建設部土木課
群馬県安中市安中一丁目23－13
印刷　マツダ印刷株式会社